

第一章・騎兵の仕事

今回のマムン氏族との交渉はより好都合な状況下で開かれた。大規模な援軍が到着したことによって、部族民は政府が本気であることを確信した。准将と区別するため彼らが「大將軍」と呼んだピンドン・ブラッド卿の帰還は彼らが頑強に抵抗する場合、直ちに新たな作戦が行われるという事実を印象づけた。まだ焼かれていない村がいくつかあったため、彼らはそれを救うことを切望していた。また彼らはその力についてはっきり分からない長いトペ（*現地言葉で大砲）、あるいは野戦砲の外観を嫌っていた。そこで彼らははるかに謙虚な心的態度を示した。

他方、軍の全員はマムン下渓谷から抜け出すには「半ペンスよりも多くのキック（*more kicks than happenence猿回しの猿のしつけ方）」であることに気付いていた。平野のすべての村は破壊されていた。丘のくぼみにほんのわずかの村が残っていた。敵はそこに退却していた。Arrian's History of Alexander's Conquestsにはこうある。「バジラ「バジラはバジャウルと同じ」の男たちは、自分たちの事態に絶望し、街を捨て、他の野蛮人と同じように岩場に逃げた。すべての住民は都市を捨て、彼らの土地にある岩場に飛ぶように走っていった。」アレキサンダーの困難が始まったのはその時であった。歴史家は次のように重々しく断言する。「この土地の岩は途方もないのであり、ゼウスの息子ヘラクレスでも攻略できない。」歴史は繰り返し、バジャウルの人々は戦術を繰り返した。旅団が思いのままに村を奪取し焼却する能力については疑いの余地はない。それと同時に彼らは戦闘を引き継ぐアフガニスタンの部族民やアミール軍の正規兵と会戦するであろうこと、その作戦において将校と兵士を失うであろうことは確実であった。この問題はどんな代価を支払っても終わりにしなければならなかった。早ければ早いほど良かった。

しかし和平の兆しにもかかわらず採餌隊は常に銃撃を受けており、これは騎兵隊の価値を示すいくらかの機会を与えた。私はこの機会に作戦中の騎兵科の実績を振り返ってみたいと思う。旅団がバジャウルに入るとすぐ、第一一ベンガル槍騎兵隊は騎兵の正当な任務である偵察にどンドン利用された。ピートソン少佐は毎日、情報が必要とされるとさまざまな渓谷と峠への遠征を行なった。このように騎兵隊を使用することは危険であると考えられており、この騎兵隊の使用法は、辺境ではまったく新しいものであった。騎手は有利に戦いつづけるためには良い地面を必要とするが、どんな土地でも―荒れていても―容易に移動することができ、必要な情報を集めることができる。

辺境での騎兵の使用機会には偵察だけではない。彼らは情報収集に役立つため、攻撃的戦術において恐るべき存在である。

山岳戦闘において通常彼らの任務は一方の側面を守ることである。その地においてはいかなる形の突撃も滅多に可能ではなく、兵士はカービン銃を使用する必要がある。九月三日（*アグラ村の破壊）、騎兵隊はそのように使用された。敵の陣地の左側には一面に低木が生い茂った広い谷と石壁があり、多数の敵が陣取っていた。この部族民が谷から出てくることができたら旅団の側面が襲われ、一つの危険な状態になっていたであろう。五時間にわたって敵を食い止めるためにはガイド騎兵隊の弱い二個戦隊で十分であった。

彼らが採用した方法は注目に値する。六―七人の兵士の小さなグループが下馬し、カービン銃で敵の銃火に応射した。他の騎乗した兵士の小さなグループがヌラーや窪み、または障害物の後ろに隠れていた。敵が下馬したパーティーの一つに突進しようとして荒れた地面から前進しようとするたび、騎乗した哨戒隊が全速力で前に進んで追い払った。部族民の騎兵隊に対するこの恐怖は、彼らの常の性質とは対照的である。これはこの種の戦争における騎兵隊戦術の鮮やかな發揮であった。これにより膨大な数の敵が主要な戦闘への参加を妨げられたことを思えば、騎兵科の力と価値が説得力を持って証明されたことになる。

一〇月六日、小規模ではあるが非常に似た任務を私は目撃した。戦隊は採餌隊の活動の保護に従事していた。哨戒横隊は急速に動き回るため敵の狙撃手としては難しい目標となっていた。戦隊の残りの部分が下馬して大きな石堤の後ろにいるのに私は気がついた。カービン銃を持った二〇人のスワールが、約三〇〇ヤード離れたモルチャー―小さな石の砦―を占領している敵と交戦していた。散漫な小競り合いがしばらく続き、半マイル離れた丘からもモルチャーからと同様の銃撃があった。弾丸は堤の近くに落ち続けたがその遮蔽効果は良好であり、負傷者はいなかった。ようやく採餌が終了し、戦隊が歩兵隊の援護の下に撤退するという知らせがもたらされた。今や興奮の瞬間が来た。指揮官は部下が騎乗した瞬間、敵が保持するあらゆる地点から銃撃されることをよく知っていた。彼は最初の部隊に騎乗を命じ、二番目の部隊に撤退の援護を命じた。兵士らは我先に鞍に乗り込み、展開して短縮駆歩で約三〇〇ヤード先の窪みへ伸びる線となった。たちまち銃撃が起こった。騎兵たちの近くにホコリが噴き上がり、その耳元を弾丸がヒューという音を立てて飛んで行った。しかし誰にも命中しなかった。その間残った部隊は彼らの撤退を援護するために敵に速射を続けていた。そして彼らが行く番になった。最後の一斉射撃の後、兵士らは馬に駆け寄り、騎乗して、先の隊を―彼らが行く番にしたように長い線状に伸びて―収縮駆歩で追いかけた。再び敵が銃撃し、再び地面のホコリは弾丸が良く狙いをつけられていることを示していた。しかし再び負傷者はいなかった、そしてスワールはくぼみに到達し、笑い、上機嫌で語り合った。それでもやはり戦隊は朝の小競り合いで一人の兵士と一頭の馬がともに重傷、という損失を被った。

第二旅団がイナヤット・キラのキャンプにいる間、このような出来事がほぼ毎日発生していた。これは兵士を訓練する上で最大の価値を持っていた。ガイド騎兵隊は辺境戦争について知るべきことをすべて知っているが、他の多くの連隊もそのような経験の機会に恵まれるならずと強力な戦闘組織となることであろう。

一八九七年のインド辺境戦争が示した大きな特徴は、騎兵隊の並外れた価値である。シヤブカドルでの第一三ベンガル槍騎兵隊の突撃は成功以上のものであった。スワット渓谷ではチャクダラの救援においてガイド騎兵隊と第一ベンガル槍騎兵隊が敵に最も恐るべき損失を与えた。副官へのビンドン・ブラッド卿の公式報告の言葉を引用するならこれらの連隊は「復讐に燃えて、追跡し、切り刻み、あらゆる方面において槍で突き、その死体で戦野は濃く覆われた。」ランダカイの行動の後、騎兵隊は再び最も精神的に追撃を行い、多数の敵を殺した。私はマラカンド野戦軍にいる間、騎兵隊が絶え間なく使用されているのを目撃したが、将官からはより多くの数を自由に使えるとうれしい、と何度か言われた。読者は本書において騎兵の仕事記録した数多くの事例のいくつかを思い出すかもしれない。九月一五日の朝、騎兵隊は敵が丘に到達する前に追いつき、前夜の損失（*マルカナイ）に対して復讐することができた。一六日の戦闘で、コール大尉の戦隊の突撃は敵の全体攻撃を停止させ、歩兵隊が自らの銃火によって部族民を躊躇させ、退却に転ずることを可能にした。実際、マムンド渓谷でのあらゆる戦いにおいて騎兵隊が最初に入り、最後に出たのである。公式のデイスパッチでは、ビンドン・ブラッド卿は公式デイスパッチにおいて騎兵隊の仕事についてこのように言及している――「今、私は騎兵隊が提供した軍務のかけがえのない性質に注意を喚起したいと思う。ナワガイでは、第一ベンガル槍騎兵隊の三個戦隊が地域を席卷した。騎兵隊が行ける場所であればどこへでも偵察を行い、信号隊を保護し、敵のすべての動きを監視したのである。マムンド渓谷において同じ連隊のE・H・コール大尉指揮下の一個戦隊は、彼らがそこにいる間に起こったすべての戦闘に参加した。そしてたとえ敵が数ではるかに勝っていたとしても、あえて広い場所で彼らに立ち向かうことは決してないという評判を確立した。後にコール大尉と部下はマムンド渓谷を離れたが、アダムズ中佐指揮下のより強力になったガイド騎兵隊が同じ方法で高次の戦術的スキルを示し、顕著な武勇と組み合わせさせていっそう効果的に行動した。」――公式デイスパッチ一八九七年一月三日、インドの官報から。

騎兵隊のブームがあった。しかし一つの部分、そして最も重要な部分は、その幸運の分け前を拒まれてきた。当局はイギリスの騎兵隊の辺境での勤務をずっと拒んできた。もちろん、これは費用を根拠として弁護される。「イギリスの騎兵隊は非常に金がかかる」と言われ、そして「現地兵も同じように仕事をできる。」「より良く。」と言う人もいる。しかしそれは軍務の最も高価で重要な部門に水を差す、貧しい種類の儉約である。軍に入った若

い將校が自分の前に置くべき野心は、戦闘において部下を率いることである。これが彼の生気を鼓舞し、その奮闘を励ますのである。その快適な馬上で彼の命と名誉がいつかそれに左右されるかも知れないことに思い至ったとき、「馬小屋」もはやつまらなくなってくる。彼が間もなくピンチの時に部下に自分の傍らに立つことを命ずるかもしれないと思うなら、もはやその利害や業務が退屈ではなくなる。しかしすべては虚しい展示物であり、その連隊が高価すぎて抜けない剣であることに彼が気づいたなら、自然に熱意を失い、気休めとしてポロに行くようになるかも知れない。それも良いものだが。

騎兵隊と歩兵隊の両方の辺境連隊で、多くの若い兵士に出会えたことは私の幸運であった。彼らはすでに三年、あるいは四年も服務していた。大胆で、知的で有能な彼らは、その訓練の価値を証明しており、どんな条件下でも、どんな国でも彼らの部下を率いるにふさわしい。イギリスの騎兵連隊の下士官は、輸送將校、信号將校、戦争特派員、またはスタッフ（*参謀など）の現役の軍務を折りに触れて少し経験することができ／＼しかし平和の中で訓練を受けた人物が戦野で兵士を率いる可能性は決して熟慮に値しない。楽しみたい、軍の仲間付き合いで数年間を愉快に過ごしたい、仕事を持ちたい、と思っっている若い人にはイギリスの騎兵隊が向いている。しかしプロフェッショナルな兵士になりたい、戦争のエキスパートになりたい、実践的戦略の専門家になりたい、ハードな冒険の日々と戦場での真実の友情を求める若者には、私が見たガイド隊や第一ベンガル騎兵隊のようになすばらしい辺境連隊の選択をお勧めする。

私は物事の既存の状態を批判する人々は、彼らが非難する弊害を是正する建設的な法律を準備しているべきであると理解している。インド政府が全面的あるいは部分的に私の助言を容れることはまずないが、ここで私は彼らに愚かな「安物買い」政策をやめ、インドでイギリスおよび現地人の軍隊を使用する場合の正規の比率の原則を順守するよう強く勧告する。すなわち、二個現地騎兵連隊が辺境任務に派遣されているとき、三個目はイギリス軍の騎兵連隊であるべきである。

これに加えて騎兵隊將校に可能な限り多くの現役の軍務を経験する機会を与えるため、下士官が現地騎兵隊の緊急雇用^にに志願することを許可するべきである。私は現地騎兵連隊を指揮する数人の將校と話をしたが、將校は常に不足しているのでそうした取り決めはうまく機能して必要を満たすであろう、とのことであった。下士官は大佐の承認を得て現地連隊に所属し、ヒンドウスタンで過^こし、現地軍に勤務する資格があると報告されたなら、雇用可能とされるべきである、と既に書いた通り私は指摘する。財政的に難しいと言われるであろう。私はこれを信じない。政府の強欲さがいかなる協定を課そうとも服従するほど、軍務の経験に強い意欲を持っている騎兵下士官が大勢いる。本当のところ、実際の経済に影響してはならない理由はない。インド政府がヒンドウスタン語を話す將校への報奨

として提供してきた金額は、これまで多くの騎兵将校を言語の学習へ誘導してこなかった。ここにはより強力で費用が一切かからない動機がある。

専門的になることは重い罪であることに私は気づいている。もしこの本が悪評を得るのであれば、下院の軍事の夕べが疎まれるのと同じように疎まれるのであると考えている。私はマラカンド野戦軍から遠く離れて軍事的論争のややこしい小道に迷い込んでしまったようである。何を書いていたかを忘れさせてしまったであろうことを読者には許していただきたい。

前章で説明した戦闘と継続的な疾病の発生により再び野戦病院は満床となり、軍隊の機動性を維持するため、すべての病人と負傷者を直ちに基地に送ることになった。陸路で一〇〇マイルを超える旅は二週間近くを要し、揺れと暑さがその経験を負傷者にとって痛ましくうんざりするようなものにした。しかし戦争の厳しい窮乏においてはこういったことは不可避である、そして家に近づきたいという兵士の願いはその苦しみの多くを和らげる。病人と負傷者の護送隊は、自身がいくらかの療養を必要としていた王立ケント隊によってパンジコラ川まで護衛されることになっていた。インドにおいてテントなしで遠征を行うことは常に英国の連隊にとっては試練である／＼としてペシャワル、デリー、ミアン・ミアなどの不健康な駅から前線に移動すると兵士は熱に飽和され、夏の暑さに衰弱して病人のリストは長く深刻になる。地表の水を飲むことによる腸チフス、および日中の暑さや夜間の寒さへの暴露の結果としてのその他のさまざまな種類の熱病はたちまち戦力から百人を奪ってしまう。インド辺境軍の將軍は敵の動きと同じくらい病院報告書の変動に注意を払わなければならない。従ってピンドン・ブラッド卿がマムンド族は和平を望んでおり、それに対するさらなる作戦はおそらくないだろうと見たとき、すぐさま配下のイギリスの一個連隊をパンジコラ近くのテントに送ったのであった。

九月三〇日と一〇月三日の戦闘で負傷した約六〇人の兵士と、同数の病人が護送団の大部分をなしていた。軽傷者はラクダで運ばれた。現地ベッド台を二つに切って作った「カジャワ」と呼ばれる揺りかご状の架台に乗るのである。より重傷な者は白いカーテンで太陽から守られ、四人の現地人によってドーリーまたは担架で運ばれた。ラバに乗れる者は乗った。歩兵隊の護衛は考え得るあらゆる予防策をとりつつ列に沿って配置されている。しかし扱いにくい荒れた地面に苦しむドーリーと動物の長いラインへの攻撃の危険は、非常に現実的で恐ろしいものである。

負傷した兵士の機嫌の良さと辛抱強さは信仰を超えている。おそらくそれは、間近で死に立ち向かったことによって彼らが会得したものであろう／＼おそらく部分的には安堵感が人の心をしばし戦争から平和へと（*争いから平安へと）逸らせるためであろう。いずれ

にせよ、それは驚くべきことである。気の毒な仲間、バフ隊の兵卒がザガイで撃たれ、腕を肩のところで切断された。私が同情を表明すると彼は哲学的に「卵を割らなければオムレツを作ることはできない」と答えて一呼吸おいた後、とても満足げにつけ加えた。「あの日連隊はうまくやった。」彼は兵士の家系の出であったが、私は彼を待ち受けているであろう未来について沈思せずにはいられなかった。医学的に不適合とされることによる軍務からの解雇、飲酒以外の楽しみを見つけないことが叶わない不十分な恩給、浮浪者の生活、貧困者の墓。おそらく連隊、つまり将校は彼を働かせることに成功したのでその資産から彼の年金に追加をであろう。しかし、世界で最も裕福な国がそれに良く貢献した兵士を顧みず、国が誇り高く負うべき責務を新聞の慈善活動、地元の機関、そして民間の慈善団体に託すというのはなんとという邪悪で恥ずべきシステムであろうか。

縦隊は六時に出発し、八マイル行進して一〇時頃にジャーに到着した。ここで王立西ケント隊を救援するために来ていた第二四パンジャブ歩兵隊の一翼が加わった。ジャーのキャンプは北の丘から見渡されているという不利な点がある。そしてその名前を聞くのも苦痛な別の厄介な部族、サラルザイ族は夜間に軍隊に発砲して勇気を見せびらかすことを楽しんでる。もちろんこの丘からの射程外にキャンプを移動することでそれを防ぐことができる。しかし残念なことに、そうしたとしても南にある別の丘から見渡されることになり、そこからウトマン・ケル族のシャモザイ部門―それについても私が先に述べたことが当てはまる―が同様のことを楽しむことになる。それゆえ不自由な事態に直面せざるを得なかった。

作戦中比較的忠実だったジャーのカーンの長男がその夜「狙撃」があることを指揮官である大佐に知らせに来たのは、私たちがキャンプに着いて間もない頃だった。特定の邪悪な男たちが部隊を滅ぼす意思を表明したが、ジャーのカーン位の相続人であり、女帝の味方である自分は私たちを守るつもりである、と彼は言った。私たちの眠りが妨げられないように彼自身の常備兵の中から四人の見張りを立ててキャンプを監視させ、歩哨に誰何されたときには「チョコキダル」(夜警)と答えるようにしよう。これはすべて非常に満足のいくもののように思われたが私たちはいつものように周りに塹壕を掘った。保護者の力や性向を疑ったためではなく、すでに説明したように単に形式の問題としてである。

ちょうど夜の一二時、キャンプは連続した十数発の速射によって起こされた。カーンの見張りたちが敵を諷めるのが聞こえ、敵は嘲りと敵意に満ちた言葉で答えた。

発砲は一時間続き、「狙撃手」は自尊心を満足させて、感情を和らげ、弾薬筒を消費して喜んで去って行った。軍全体は沈黙を保ち、応射を授けたりはしなかった。

動物と兵士で込み合った一〇〇ヤード四方のキャンプに五〇発の弾丸を落として、一頭のラバの尾を撃つという以上の結果を得られないというのは信じがたいことかもしれない。しかしそれは事実であった。これは少しであっても現役の軍務が兵士にとっていかに価値があるかということを示している。初めて砲火を浴びたとき、彼は自分が大きな危険にさらされていると想像する。すべての弾丸が自分に当たろうとしており、すべての射撃が自分に向けられていると考える。確かに彼はたちまち殺されるであろう。この試練を一度か二度経験すれば、その利益のオツズについて彼はなんらかの考えを持つようになる。多くの弾丸の音を聞いたが、それは自分を傷つけなかった。昨日のように今夕も無事に帰ってお茶を飲むことであろう。彼はより一層非常に強力な戦闘機械になる。

軍事的な観点から見ると帝国の一、二か所で永続的な辺境戦争があることには最大の価値がある。この事実はいつか私たちの兵士が平時に訓練された同数の徴集兵と対峙した時に証明されるかもしれない。

発砲は軍隊にほとんど影響を与えなかったが―ほとんどの者が何度も経験したことがあったが―それは負傷者に対しては厳しい試練であった。その神経は痛みと衰弱でくたくたに疲れていて、緊張に耐えられないのであった。担当外科医―タイレル少佐―は、哀れな仲間はあらゆる銃撃が打撃になるとでも思い込んでいるかのように震えている、と私に告げた。脚への弾丸は勇敢な兵士を臆病者にしてしまう。頭への打撃は賢者を愚か者にする。実際、私は十分な量のアプサンは善良な人間を悪党することができる」と読んだことがある。物質に対する精神の勝利はまだ完全ではないようである。

射撃が行われている間に奇妙なことが起こるのを見た。それは動物の習性と発育に興味を持つ人には面白いかもしれない。私のテントのすぐ前には開けた空きスペースがあり、山羊と羊の群れが占有していた。輝く月明かりですべてをはっきり見ることができた。弾丸がその上で口笛を吹くか、近くの地面を撃つたびに、彼らは明らかに恐怖で身をかがめ上下に揺れた。これに気づいた将校は彼らが砲火を浴びるのは初めてだと言った。そして、これは恐怖心で説明できるものなのか、それとも説明し難いものなのか、私はそれからずっと疑問に思っている。

一〇月九日夜のジャーの「狙撃」の記述にこの章のかなりの部分を割いた。そして評論家はなぜそのようなありふれた出来事について多くを書かねばならなかったのかを尋ねるかもしれない。しかし、この夜間射撃はそれについて何らかの記述がなければインド辺境戦争の描写が完成しないほど、非常に一般的な特色であると私は感じている。

翌日私たちはパンジコラ川を渡り、私は騎馬でノウシエラ基地への連絡線を出発した。

各段階において何らかの文明と平和の利器が再び出現した。パンジコラでは電信線／サライでは新鮮なジャガイモ／チャクダラでは氷／マラカンドでは快適なベッド／そしてついにノウシエラで鉄道に到達した。しかし、これらは結局のところ重要ではない。それは手元にあるときには不可欠のように見えるが、手に入らなくとも困ることはない。ちよっとした普通の食物と哲学的気質が人生の唯一の必需品である。

私は読者を戦闘の場から遠ざけない。あなたは自由であり、その想像力によって高地の谷に引き返し、そこでキャンプと兵士の間に居続けてドラマの結末を見ることができろ。